研究ノート

ジョンソン辞書構想案および序文のための註釈（1）

早　川　　勇

要　旨

Without any help from other sources, I have already translated *The Plan of an English Dictionary* (1747) and the Preface to *Johnson's Dictionary of the English Language* (1755), both of which are very difficult to translate into Japanese because of his refined style and wording. In pursuit of more accurate translation, I have to resort to the previous studies on Johnson's *Plan* and his dictionary. Here I would like to gather many notes and comments that are scattered here and there in the literature on Johnson's *Dictionary* in order that the Japanese can understand the *Plan* and the Preface fully in English letters and lexicography.

筆者はジョンソン辞書の構想案と序文の試訳を先に発表した。原文だけを頼りに，彼の辞書観や言語観に迫るのが目的であった。2008年度に海外研修の機会が与えられ，大英図書館及びロンドン大学において多くのジョンソン関連書や論文を目にすることができた。そこで，既に発表した試訳が不充分であることが判明した。新たな訳を完訳として発表したい。その前に，英語辞書の構想案（1747）および序文（1755）に関連して書かれた多数の研究書を参照し，そこにでてくる語彙や作品や表現などについての註釈をまずもってここに示したい。註釈の多くは G.J. Kolb and R. DeMaria, Jr.: *Johnson on the English Language*（2005）か

ら採った。そのすべてをここに記載したわけではない。また，他にも参考文献に示した多くの著作や論文を参照し，それらに見られる解釈や指摘も含めた。

なお，[　] のなかの番号は，構想案と序文における段落の番号である。また，以下の註釈において「ジョンソン辞書」とあるのは初版を指す。また，註のうち *The Rambler*（『彷徨者』）とボズウェルの『ジョンソン伝』などは日本語に翻訳した。

キーワード：ジョンソン，ジョンソン英語辞典，英語辞書史

[ジョンソン辞書構想案の註釈]

構想案出版以前の状況については Sledd and Kolb（1955）の綿密な研究があり，それを含めた考察は早川勇（2007a, 2007b）において行った。このため，その点については以下の註釈に含めなかった。専ら構想案の日本語翻訳と関わる点を中心に扱った。

[1]　この文脈での blind は「無知な」という意味と文字通りの「盲目の」の意味が含まれる。辞書編纂家は目を酷使するので，目を悪くすることが多いことによる。

[1]　genius を Kolb & DeMaria (2005: 26, note 4) は，ジョンソン辞書における '3. Mental power or faculties.' の語義と解している。

[1]　ジョンソン辞書には dull の例として辞書編纂がでている。'To make dictionaries is *dull* work.' ジョンソンは辞書編纂をつまらない仕事だと公言して憚らなかったが，実際にはそれほどつまらない仕事だとは思っていなかった（Kolb & DeMaria 2005: 26, note 6）。

[1]　beat の意味について Fussell (1972: 184) は次のように記している。"Later he [Johnson] will define *beat* in this sense as "To tread a path": we are given an image of a sullen, overloaded porter stomping endlessly down a narrow path unrelieved by anything interesting, let alone anything elegant or learned."

[2]『構想案』の書き出しを Fussell (1972: 184) はこう評している。"the opening, through its images, reminds us that Johnson is not only "low" in the relative social sense and "low" in the (mistaken vulgar) idea of the lexicographer's capacity and value—he is also, ironically, half-blind and thus the least likely aspirant to lexicographical honors"

[2]　nature は「本質」と訳した。前の語である truth の言い換えに近い。

[2]　'the barren laurel' について，オレリー伯爵（Earl of Orrery）がバーチ博士（Dr.

Birch）に宛てた手紙のなかで言及している。「もちろんいくつかの表現に難癖をつけることはできますが，それは些細なことです。一例を申し上げれば，不毛な月桂冠（The *barren* Laurel.）という表現です。月桂冠はいかなる意味においても不毛ではなく，実際に花も実もつけます。しかし，これらは些細なことです。私はこの事業に大いに期待しています。」（Boswell 1934: I 185）

［5］ この詩人の詩とはヴォルテール（M. de Voltaire 1694–1778）の *Henry of Navarre*（*La Henrriad* 1728）を指す。彼はジョージ一世からパトロンとして援助を受けたが，彼の死後はチェスターフィールド郷（Philip Dormer, Earl of Chesterfield 1694–1773）の仲介でキャロライン王妃から支援を受けた。後援者 343 名の筆頭にその名が記されている。

［5］ ‘when her wings are once expanded . . .’ は，Burton Egbert Stevenson: *The Home Book of Proverbs, Maxims and Familiar Phrases*（New York: Macmillan, 1948）において，ヒンズーの諺だと確認された。

［6］ この段落はじめの expectation について Fussell（1972: 185）は次のように記している。“High and low again, but his time subsumed into his favorite theme of the inevitable self-defeat of hope and wishes. The object of this *Plan*, then, is “not . . . to raise expectation, but to repress it”: disappointment with the ultimate achievement will be less likely if the inevitable limitations are clearly understood at the outset.”

［6］ information は「情報，指示，助言」などの意味を含む。

［6］ チェスターフィールドへの献辞がある版では elegance or discernment となっているが，献辞のない版では elegance and discernment である。Chapman（1926: 216）は後者が表現として好ましいだろうとしている。

［6］ war は「争いごと」くらいの弱い意味で，ジョンソンがチェスターフィールドと 1746 年 10 月 29 日に会うことになっていたことを示唆していると言われる。

［7］ ‘The chief intent . . .’ の文について Fussell（1972: 186）は次のように記している。“The last sentence sounds like Johnson practically quoting Chesterfield’s remote, detached, hopeful view of the job. The *seems* with which he resumes begins to expose the weaknesses of Chesterfield’s conception; . .”

［7］ チェスターフィールドへの献辞がある版では our English idiom となっているが，ない版では the English idiom である。

［7］ ‘so far as it is our own’ の部分を Horgan（1994: 98）はこう解釈している。英語の起源からしてゲルマン系であることと，それ以外の要素がかなり入り込み同化していることを考え，このような表現を使った。

［7］ ここでいう grammatical dictionary は，ほぼ philosophical dictionary の意味で，

語彙面における一般原理を念頭に置きながら書かれた辞書のことである。

［7］ ‘naked science is too delicate’ という表現と関連し，Elledge（1967: 274）はこう述べている。“Johnson mistrusted all critics who arrived at their judgments by slavish following of system (“Naked science is too delicate”); and establishing usage on a simple statistical basis would be as foolish as relying simply on analogy, or etymology, or history, or authority—certainly as foolish as setting up a dictator, as Chesterfield has suggested.”

［7］ amuse はジョンソン辞書によると ‘To entertain with tranquility to fill with thoughts that engage the mind, without distracting it.’ の意味である。また，philosopher は ‘A man deep in knowledge, either moral or natural.’ の意味である。このため，これらの語を含む文は「器械がそのメカニズムの精密さによって技術者の心をとりこにする」と訳したい。

［7］ この段落の後半について Fussell（1972: 187）は次のように記している。“It is this opposition between facile rigorous determination and humane relaxation, between “the critic” and the common reader, between the academician who does not solicit a large body of readers and the professional writer who depends wholly upon them, in all their imperfection—an opposition projected implicitly as between Chesterfield and Johnson, and thus between social classes—that runs throughout the *Plan*.”

［8］ pompous luxuriance という表現は，ラテン語語源の難解語で埋め尽くされた辞書を念頭において使われている。ただし，McAdam（1970: 205）はこう述べている。“Bailey generally accepted them [the inkhorn terms], and Chambers excoriated both Bailey and his words. Johnson gave them a kind of reluctant acceptance.”

［9］ science は現代と意味がかなり異なる。ジョンソン辞書では「いろいろな知識の領域や学問」となっている。

［10］ meridian「子午線，経線」は試訳において「絶頂期」としたが，Kolb & DeMaria（2005: 31）はジョンソンの例文から「ものの特定の場所や状態」と考えている。

［10］ equator の源になる中世ラテン語 æquator は「平等に二分するもの」の意味。

［10］ satellites のもとの形は satelles である。16 世紀から 17 世紀初頭にかけて，一部の文筆家は satelles を「惑星」の意味で用いていた。しかし，satellites という語は「従者，かばん持ち」の意味で複数形として広く用いられるようになった。

［10］ category, cachexy, peripneumony はそれぞれギリシャ語の categoria, cachexia, peripneumonia からきている。これらの語は語尾がギリシャ語の –ia から –y に変った。cachexy は「栄養不良，栄養障害」を表す，現在では専門語して「悪液質」（慢性疾患に

よる不健康状態）の意味である。また，peripneumony は「結核」のことである。

［11］ capias（拘引状）habeas corpus（身柄提出令状）prœmunire（教皇尊信罪）nisi prius（巡回陪審裁判）は，その定義をすべて John Crowell: *The Interpreter*（1607; revised by White Kennet, 1701）から採った。ジョンソンは，英語において二重母音文字に正当な位置を与えられないとして排除したが，prœmunire については原文でこれを用いている。

［11］ ミルトン（John Milton 1608–1674）のこの例文は，ジョンソン辞書において marasmus と atrophy の両方の語の例文として引用されている。

［12］『構想案』の原稿段階でジョンソンは peculiar words ではなく dialect という語を用いた。彼は dialect を地域的方言だけでなく社会的方言についても用いた。チェスターフィールド卿はこれを適切でないとしたので，彼は表現を変更した（Sledd and Kolb 1955）。これと関連した発言が『彷徨者』（第173号）にもみられる。「それぞれの職には独自のことばの特徴があり，それを聞きなれない者にはぎこちなく不愉快に響く。このため，それが多少妙な場面で用いられたり不必要に繰り返されたりすると滑稽に聞こえる。」

［12］ 戦争や航海に関する用語の定義には *A Military Dictionary explaining All difficult Terms in Martial Discipline, Fortification, and Gunnery . . . to which is likewise added, a Sea-Dictionary of all the terms of Navigation*（編者不明，London: J. Morphew, 1708）を用いた。法律語については上記 Crowell の書を利用した。また，手工業の専門語については Joseph Moxon: *Mechanick Exercises, or the Doctrine of Handy-Works, Applied to the Arts of Smithing, Joinery, Carpentry, Turning, Bricklayer*y（2 vols., 1678–80 and 1683–84）を利用した。この書は職人たちの手引書で，道具の使い方や施工の方法などが示されている。

［14］ horse は「いななく四足の動物，戦いや牽引や輸送で利用される。」と定義され，cat は次のように定義されている。「家で飼う動物，ネズミを捕まえ，博物学者がネコ科の最下位に位置するとみなす動物。」cat の定義は比較的立派なものであるが，全体として動物に関する定義は必ずしも十分とはいえない。

［14］ 植物用語については Philip Miller（1691–1771）: *The Gardener's Dictionary*（1731）を利用した。例えば，daisy は A Spring-flower. とあり，5行のミラーからの引用文が続く。tulip も A flower. とあるだけで，その後にミラーからの26行にも及ぶ長い引用文が続く。Wimsatt（1948: 28）によると，この辞典からジョンソンは350以上もの植物の説明を採っているという。

［14］ woodbine と honeysuckle は同一植物の異名である。しかし，ジョンソンはこの作品の註釈としてこう述べている。「シェイクスピアはひょっとしたら，花と葉を含めるときには woodbine といい，花だけのときには honeysuckle のつもりだったかもしれない。」

(*The Plays of William Shakespeare*, 1765. Yale ed. VII, 155)

［18］ ジョンソンが綴りを決定する場合，慣用によって決まるのでない限り語源や類推を重要な決定要因と考えた。なお，慣用を重視する考えは『構想案』以降次第に強くなった。

［18］ Greene（1960: 314）によると，この段落の中段の言説は次の文章を念頭においているという。“Laws, as all other things human, are many times full of imperfection, and that which is supposed behooveful unto men, proveth oftentime most pernicious . . . But true withal it is, that alteration, though it be from worse to better, hath in it inconveniences, and those weighty” (Richard Hooker (c1554–1600): *Of the Laws of Ecclesiastical Politie*, IV (1597), xiv, 1)

［19］ farrier をさらにさかのぼると，中世ラテン語の ferrus（「蹄鉄」の意味）やラテン語で「鉄」を意味する ferrum にたどり着く。

［19］ gibberish に関するジョンソンの語源説は現在では退けられ，擬音語とされている。

［20］ 正字法と関連した発音に関する発言に Elledge（1967: 272）は注目している。“But it is interesting that when Johnson comes to this subject in his *Plan*, he neglects the easy opportunity to agree with the “fixers” and suggests instead that his dictionary will prolong the life of English literature, *not* by preventing changes in the language, but by supplying aftertimes with the means of reading eighteenth-century English.”

［20］ our ancient poets を 7 世紀から 13 世紀までの詩人と考えると，ジョンソンの時代には彼らの発音や韻律法はよく理解されていなかった。our ancient poets のなかにチョーサーも含めると考えるのが一般的なので「昔の詩人たち」とした。チョーサーの作詞法が解明されたのは確かにジョンソンの後であるが，それ以前にもその点に気づいた者もいた。このため，wholly ignorant「まったく知らなかった」というのは言い過ぎであろう。

［21］ 強勢を母音の後で示すジョンソンの発音表記に従うと do´lorous, sono´rous となる。

［24］ great の発音についてジョンソンは 1772 年にこう述べている。「私が辞書構想案を出した際に，チェスターフィールド卿は私に great は state と韻を踏むように発音すべきであると述べた。ところが，ウイリアム・ヤング卿は seat と韻を踏むように発音すべきで，アイルランド人以外にだれが grait と同じ母音で発音するのだと書いている。こんな風に高い地位におられるお二人方の意見がまったく異なるのである。」(Boswell 1934: II 161)

［25］ Giovanni Mario Crescembeni（1663–1728）は，*L’istorial della vogar poesia*（6 vols. 1714）において ‘orthographia nelle Poesie Volgari’ という項を設け，韻を踏ませるために各種綴りが 16 世紀に導入されたことを非難している。

［26］ ジョンソン辞書は attainment を ‘2. The act or power of attaining’ と定義した。

［26］ Kolb & DeMaria（2005: 40, note 8）によると，この段落にはジョンソンの当初の

考えであった語根を中心とする見出し語の方式の形跡がみられるという。

［27］ 序文で明言しているように，ジョンソンは語源を執筆するに際してFraciscus Junius（1591–1677）: *Etymologicum Anglicanum*（1743）とStephen Skinner（1623–1667）: *Etymologicon Linguae Anglicanae*（1671）を中心に参照した。その他に少なくとも次の書を参照した。John Minsheu（1560–1627）: *The Guide into Tongues: Ductor in Linguas* (1617), Méric Casaubon（1599–1671）: *De quatuor linguis commentationis, pars prior: quae, de lingua Hebraica: et, de lingua Saxonica* (1650), James Howell: *Lexicon Tetraglotton* (1660). 最初の著者ジューニアスはドイツのハイデルベルクに生まれたゲルマン語学者で，英語語源辞典はラテン語で書かれている。原稿をライ（Edward Lye）が編集して出版した。

［27］ wit はジョンソン辞書に ‘2. Imagination; quickness of fancy.’ の意味がある。

［27］ ジョンソンは語源としてセミ語族まで遡及することはほとんどない。sack と cabal は珍しい例である。一方，多くの語がノルド語や古代アイスランド語にまで語源を遡った。

［27］ Elledge（1967: 268）はこれ以降の段落における動詞に注目している。“The discussions of etymology and morphology are full of such verbs as *distinguish, attain, inquire, search, conjecture, discover, examine*, and *note*. In an aside on what he says his critics may consider his capricious conjectures, Johnson makes the first of a series of comments on the relation between the imperfections of language and the imperfections of mankind; . . But the section concludes with a sentence much less philosophical in which the diction is not that of an explorer but that of a missionary: . .”

［28］ ジョンソン辞書の about（*adv.*）の第９番目の意味としてこれを扱い，「これらの熟語のいくつかは，その源がフランス語の *à bout* から派生しているように思われる。」としている。その後の例は *venir à bout d’une chose, venir a bout de quelqu’un* である。

［29］ 語彙集としてジョンソンは次のものを利用した。これらの語彙集は，部分的にせよ全体的にせよ，初期の英語および初期近代英語の語彙を示すものである。William Camden（1551–1623）: *Remains concerning Britain* (1636), Henry Spelman（c.1562–1641）: *Glossarium Archaiologicum* (1664), John Hughes（1677–1720）ed.: *The Works of Mr. Edmund Spenser* (1715), William Baxter（1650–1723）: *Glossarium Antiquitatum Britannicarum* (1719), John Urry（1666–1715）ed.: *The Works of Geoffrey Chaucer* (1721), Thomas Hearne（1678–1735）ed.: *Robert of Gloucester’s Chronicle* (1724), Sir Thomas Hanmer（1647–1746）ed.: *The Works of William Shakespear* (1743–44).

［30］ 規範的な言語観と関連して，ジョンソンが用いた批判的な語としては次のものがある。Cant「ある特定の階層や集団に特異な話し方や表現」low「高尚でない，考えやこと

ば使いにおいて高尚でない」mean「出所や語源が特定しがたい語彙や表現」である。なお，Hitchings（2005: 68）はこの点に関連してこう述べている。“The imagery suggests he thinks of himself as a reformer—and not just as a linguistic reformer, but as a social one too: a moral policeman in linguist's clothing. It is no surprise to find Johnson setting himself up as an arbiter of standards.”

［32］　ローマの修辞学者クインティリアヌス（Quintilian c.35–c.100）の著作である *Institutio Oratoria*（*Institutes of Oratory*）には，類推についてかなり長い言及がある。“Analogy was not sent down from heaven to frame the rules of language when men were first created, but was discovered only when they were already using language and note was taken of the way in which particular words ended in speech. It rests therefore not upon Reason but upon Precedent; it is not a law of speech, but an observed practice, Analogy itself being merely the product of Usage.”（*The Orator's Education*, vol. I (2001): 168–169）Elledge（1967: 273）は違う点を指摘している。“At the beginning of the chapter on language Quintilian says, “Language is based [*sermo constat*] on reason, antiquity, authority, and usage,” by which he means that the question of what words or idioms or constructions are correct or acceptable may be answered by reference one or more of these four criteria. (. . .) Of the four criteria, usage is “the surest pilot,” he says, and adds that “we should treat language as currency minted with the public stamp”.”

［33］　ここで用いられている southern は「ラテン語またはロマンス語のうちの一つ」を指すと考えられる。ここで述べられていることの裏を返せば，英語本来のアングロサクソン系の動詞は不規則活用が多いということである。

［34］　他動詞と自動詞を transitive, intransitive を用いて表すようになったのは 19 世紀ころからである。ジョンソン辞典では *v.a., v.n.* と略記される。

［35］　言語に対して，理性に基づいた「哲学的，原理的」側面を望む発言である。この段落は次の段落との対比で読まなければならない。

［35］　‘these fundamental atoms . . . particles of matter’ の部分は，『彷徨者』（第 68 号）の一節を思い起こさせる。「錬金学者が私たちにいうように，すべての物体は複数の同じ要素に分解できるし，ごくわずかな数の成分のいろいろな配合によって限りなく多様なものが生まれる。それと同じように，ほんのわずかな種類の苦痛や喜びが人生を形成するすべての素材である。そして，それらの調合の割合は天の思し召しによって決められる面もあれば，人の理性や偶然の配合にまかされる部分もある。」

［36］　この段落の冒頭を Hedrick（1988: 434）はこう解釈している。“Then he emphasizes

that such a dream is clearly no more than a dream, for stability “is a privilege which words are not to expect”: . . The wild dream of linguistic stability becomes a natural and universally held “wish,” and the firm assertion that art “cannot” prevent the mortality of words is softened to an observation that it will “rarely give them perpetuity.””

［37］ syntax をジョンソンは辞書において「語彙の構成を明らかにする文法領域」と説明している。今日の統語論よりも狭い意味で，語の屈折や語連結を特に問題としている。

［38］ アディソン（Joseph Addison 1672–1719）は英国のエッセイスト，詩人である。友人のスティール（Sir Richard Steele 1672–1729）とともに *The Spectator* を創刊し，二人で多数の随筆を書いた。それを模したのがジョンソンの *The Rambler* などである。

［39］ make を用いた表現は熟語として掲載しているのではなく動詞の様々な意味として列挙している。ジョンソンがこの点に目を向けたことは英語辞書史において画期的であるが余り評価されていない。なお，熟語を本格的に整理し提示したのはウェブスターである。

［40］ 当初，ジョンソンは多言語辞典の編纂を目論んでいた。多言語辞典では問題にならない日常語彙の定義にかなり苦労した。このためか，これらの語の定義にはラテン語やギリシャ語語源の語彙をかなり用いているという。DeMaria（1986: 114–5）によると，ジョンソンが利用したと明言しているエインズワース（Robert Ainsworth 1660–1743）の羅英・英羅辞典（*Thesaurus linguae Latinae compendiarius* 1736）から 523 語の定義をジョンソンは借用したり翻訳したりした。

［41］ ‘my book is more learned than its author’ はフランス語辞典の序文からの引用英語翻訳である。フュレティエール（Antoine Furetière 1619–1688）はフランス・アカデミーから離れ，独自にフランス語辞書を編纂し 1690 年に出版した。この辞書は多くの改訂者を得て，第２版が 1701 年に，第３版が 1708 年に出版された。この文は，それら改訂版の序文にあったことばである。

［42］ arrive を例として取り上げ，Hardy（1979: 110）はこう述べている。“Though in the *Dictionary* Johnson cites French *arriver* as the immediate origin of *arrive*, he seems, in thinking about the word, to be going back to its original Latin elements, *ad* (‘to’, ‘towards’) plus *ripa* (‘shore’). This kind of insistence on the ‘original and etymological sense’ had, as we shall later see, far-reaching implications.”

［46］ Keast（1954）は，［46］から［48］までの ground を扱った部分は削除する予定であったものが，何らかの理由で残ってしまったという説を唱えている。

［49］ 試訳においてこの例文の出典はわからないとしたが，ミルトンの『失楽園』（IV, 304–307）からの例文である。ただし，原文には間違いがあるが，ジョンソン辞書において

は訂正されたものが掲載されている。“Dishevell'd, but in wanton ringlets wav'd” である。

［50］ この文中の toast はジョンソン辞書の次の意味にあたる。‘3. A celebrated woman whose health is often drunk.’ である。

［53］ この発言にもかかわらず，英語辞典においてこのことは行われていない。

［54］ この発言にもかかわらず，英語辞典においてジョンソンは類義語を体系的に扱っているとは決して言い難い。これはこの辞書における一つの欠点と認識されたと思われる。このため，ジョンソンの死後，親友のピオッティ（Hester Lynch Piozzi 1741–1821）の著作をはじめいくつかの英語類義語辞典が編纂された。

［54］ Hitchings（2005: 67）は ought という語の使い方に注目している。“Perhaps we can hear a note of anxiety (he describes what ‘ought’ to be done, rather than what will be done), but the general tone is confident.” なお，この ought は第 13 段落にも現れる。

［55］ fearful に関してジョンソンが主張した点は言語学的にきわめて重要であるが，実際の辞書における取り扱いは十分ではない。これらの点から推測されることは，『構想案』の段階では言語学的色彩の強い辞書を考えていたが，引用文の採取およびそれらの文をにらんだ語釈を実際に行う作業を通じて，文学的色彩の強い辞書に自然に移行していった。

［55］ ジョンソン辞書は To Exhort を ‘To incite by words to any good action.’ と，To Instigate を ‘To urge to ill; to provoke or incite to a crime.’ と定義した。

［55］ Horgan（1994: 85）は ‘the decrees of custom’ に関し次のように述べている。“‘Custom’ in the first paragraph I have quoted must mean the custom of correct writers, for the passage to make sense. Moreover, it appears that the custom even of the correct must be endorsed and ratified by ‘grammar and reason.’”

［56］ Richard Bentley（1662–1742）が編纂した *Milton's Paradise Lost*（1732: 196）には次のような解説がある。

> [What stood, recoil'd . . . or *Fled ignominious*.] This Sentence is inexplicable. What Contradiction is that, *what stood, fled*? And yet that is the plain Syntax, as it now stands. And what's THROUGH *the Host*? Some wrong must have been done to our Author here. To come at his Meaning and Intention, the whole Paragraph must be reform'd. This way may be one:
>
> *And fiery foamy steeds*. Yet somewhile stood
> *The faint* Satanic *Host*; o'erwearied stood
> *Defensive scarce*: *then with pale fear surpris'd*
> *Then first with fear surpris'd*, & c.

［57］ ジョンソン辞書の eke の第４番目の語義には次の説明がつく。「無意味な追加を行

うことによって引き延ばす。〔この意味では，我が国の古代の詩人が用いたところから借用されたと思われる。彼らは1音節欲しい時に eke を詩行のなかに入れた。〕」

［57］ ジョンソン辞書の buxom 語源解説には同種のことばがみられる。「この語は元々 obedient の意味だった。（中略）改革以前の古い結婚の様式においては，花嫁は obedient and buxom in bed and at board と約束した。この表現が十分に理解されず，この表現から現在の意味が派生したようである。」また，Hardy（1979: 119）はこう述べている。“The meanings there assigned the word are first ‘obedient’, ‘obsequious’, then ‘gay’, ‘lively’, ‘brisk’ . . . then ‘wanton’, ‘jolly’. Yet in his discussion of the etymology of the word . . . Johnson makes it clear that he regards these later meanings as something of an aberration: . .”

［58］ ‘drops added to drops constitute the ocean’ これと同種の発言は『彷徨者』43号にも見られる。「人間の技術が生み出すすべてのものを私たちは称賛と驚嘆の気持ちでながめるが，それらの偉業は忍耐という抵抗できない力のなせる業である。まさにこの忍耐によってこそ，石切り場がピラミッドとなり，遠方の国々が水路によって一つになるのだ。もし，つるはしの一振りや鍬の一掻きの結果とその全体の計画や最終的な結果とを人が比較するならば，その差が歴然としているのに圧倒されるだろう。しかし，これらの取るに足らない作業も休むことなく続けられれば，まもなく最大の困難な事業も乗り越えられる。そして，人間のか細い力によって，山々は平らにされ，大海も埋められるのだ。」

［62］ このような意図にもかかわらず，実際の辞書においては詩語が何らかの記号（レーベルに近いもの）によって示されているわけではない。

［63］ エリザベス女王即位の1558年以降の文筆家として最も古いのはシドニー（Sir Philip Sydney 1554–1586）である。しかし，それ以前のアスカム（Roger Ascham 1515–68）の作品からも100ほど引用がなされている。

［64］ 廃語（obsolete）や使用しなくなった（not in use）語彙についは，筆者の論文（Hayakawa 2008）がある。

［64］ この段落の最後の文例として特に用例が多いのはドライデン（John Dryden 1631–1700）である。

［65］ 英国の風刺詩人バトラー（Samuel Butler 1612–1680）の *Hudibras*（1663, 1664, 1678）やプライアー（Matthew Prior 1664–1721）の *Alma; or the Progress of the Mind*（1717）から引用文は採られている。なお，おどけた作品（burlesque work）に用いられる語としてはgrannamなどがある。なお，バトラーはイギリスのWorcestershire州のStrensham で農家の息子として生まれた。その地のKings Schoolで学び，王政復古後にウェールズの Lord President の秘書となった。上記の詩集で知られている。清教徒主義を

皮肉った狂歌である。この詩集のみで知られ，宮廷からは無視された。

［66］ ポープ（Alexander Pope 1688–1744）の２例は *An Essay on Man*（1711. II, 17）と *The Rape of the Lock*（1712. I, 87）からのものであるが，辞書に引用されていない。アディソンの例は “To the Right Honourable Sir John Somers”（1, 19）であるが，これも引用されていない。また，ドライデンの例は *Astraea Redux*（ll, 3–4）である。これは引用されている。

［67］ ジョンソン辞書には determine の意味として ‘6. To influence the choice.’ がある。この動詞が受動態で用いられていることに関連し，Fussell（1972: 190）は次のように記している。“Johnson has no doubt that in dealing with words he is dealing with a very imperfect and disorderly accumulation of signs. The one thing he seems uncertain, even uneasy, about is setting himself up as an authority on usage; and he indicates that it is only Chesterfield’s importunity that has half persuaded him that maybe he ought to prescribe usage. His movement into the passive voice (“I have been . . . determined”) seems the gauge of his embarrassment: . .”『構想案』にみられるジョンソンの規範的態度はチェスターフィールドからほぼ強制されたもので，支援を受けるためにつけなければならなかった仮面だとしている。

［67］ ‘Cur me posse . . .’ はローマの詩人アウソニウス（Decimius Magnus Ausonius c.310–c.395）の *Epigramata de diversis rebus*（*Epigrams* i, 12）から採ったもので，‘Why should I say that I cannot do what he thinks I can?’（Preface to *the Emperor Theodosius*, 12 行目）の意味である。

［67］ この段落に関連し Hitchings（2005: 69）は次のように述べている。“The language of this passage is constitutional: equating himself with the Roman colonists, he apparently aspires to the formalism of Roman Law.” また，同種の意見は 1752 年３月に書かれた『彷徨者』の最終第 208 号にもみられる。「人類の最終判決がいかなるものであろうと，私は少なくとも人々の親切心に報いるように努力してきた。私たちの言語を文法的な純粋さにまで純化する努力を私はしてきた。また，我らが言語から口語の野蛮な表現や慣習を無視したことば使いや不規則な語連結をなくそうと努めてきた。おそらく，英語の構成の上品さやその抑揚の一致に多少とも寄与しただろう。ふつうの語は耳に快く響くわけではなかったし，その意味において明確な区別があったわけでもない。このため，私は学問的な用語を日常的な事柄にあてはめて，それらの用語をなじみのあるものにしてきた。ただし，かつての著述家たちによって正当と認められていないような語はめったに導入しなかった。というのは，現在の枠のなかで英語を理解している人は誰でも，ほかの国々からさらなる助けなしで自分たちの考えを表現できると私は信じているからだ。」

［68］ ジョンソンは不適切な作家からの引用をしないようにした。この点に関し，Hardy（1979: 122）はこう述べている。“Johnson was, however, most sedulous in excluding those writers whom he considered ‘infidel’ or ‘immoral’, and two notable omissions from his list of authorities are Hobbes and Shaftesbury.”

［68］ この段落の内容と関連し，Krutch（1944: 95）は literary usage という考えを提起している。“He [Johnson] was ready to assume that good usage is generally the final test of correctness and he proposed to use his own authority only where literary usage could not be cited to settle a question. But it is significant that he assumed *literary* usage to be the only sort which carries much weight, and that he did undertake to make his own taste or judgement the deciding factor where literary usage seemed inconsistent.” また，McDermott（2005: 118）は usage のレベルを３つに分ける考えを提案している。“Johnson’s presentation of usage in the *Plan* covers three separate but overlapping concepts: usage of the best writers, who are regarded as models of style and “authorities”; usage from the period “since the accession of Elizabeth,”. . . ; and common usage or custom.”

［68］ ‘pleasure or instruction’ については，辞書の序文にもその言及がある。DeMaria（1986: 13）は，ジョンソンが自らの辞書を教育的な著作とみなしていたことを暗に主張しているのではないかと述べている。『彷徨者』には同種の表現や意見が散見される。「事実，教えとか喜び（instruction or delight）を与えそうにない人によって，しばしば伝記が書かれる理由（わけ）がある。特定の人々に関する多くの物語は，内容がなく無益であったりするのには当然な理由がいくつかある。」（第60号）「昔からこう思われてきた。周りの人々を喜ばしたいとか教育したい（entertainment or instruction）と意図する者は，何か独自の才能のひらめきを自ら感ずる人間でなければならない。」（第145号）「おそらく相手を楽しませ知識を授けよう（entertainment and instruction）と考えたりする学者，最悪の場合には，聴衆の人柄を十分に配慮せず話したりする学者が非難されるのはこのためだ。これらの悪意のない学者たちは社会的便宜や会話の作法を軽蔑するので，傲慢だとか横柄だとか，さらには名を広めたいばかりだと非難されるのである。」（第173号）「確かに，娯楽も教訓（amusement and instruction）も，それを見つけだす技能と積極性のある人には，常に手の届くところにある。」（第197号）

［69］ 同種の疑問は，風刺詩人ユエナリス（Juvenal c.60–c.128）の *Satires*（6, O 31–32）や哲学者プラトン（Plato 427?–347? B.C.）の *Republic*（403e）などの著作にもみられる。

［70］ ジョンソンが提示した語彙を歴史的に考察する方法は，*OED* において初めて実現する。なお，*OED* が構想された当初は，ジョンソン辞典の改訂増補版を目指していた。

［70］ ミルトン（John Milton 1608–1674）からの引用文最初２行の原典は *Paradise Lost*（1667. I, 612–613）で，その正しい引用文は次の通りである。“As when Heaven's fire/ Hath *scath'd* the forest oaks, or mountain pines” また，次の２行の原典も *Paradise Lost*（V, 269–270）からで，正しくは “with quick fan/Winnows the buxom air” である。なお，buxom については［57］の註釈を参照のこと。

［72］ ‘a dictionary by which . . . its duration lengthened’ ここに見られる態度を現在問題とする規範的態度（prescriptivism）と規定できるかは疑問である。ジョンソンにとってこれは規範的でも何でもなく，単に自分が設定する基準からはずれているものを正したいとする気持ちだけである。また，この態度は Fussell（1972: 191）が強調するようにジョンソン自身のものではなく，チェスターフィールドから押し付けられたものかもしれない。彼はジョンソンの用語法に注目し，こう述べる。“Notice now the ironic force of *perhaps* and *may be* and *difficult—perhaps* and *may be* constitute moments of mock-determination of a question already fully determined; and for *difficult* read *impossible*:”

［72］ この発言にもかかわらず，ジョンソンは辞書において多くの翻訳書を利用した。George Chapman's *Homer*, Pope's *Homer*, Dryden's *Vergil*, Dryden's *Juvenal*, Charles Alphonse Dufresnoy's poem *De Arte Graphice.* 彼はドライデンやポープの翻訳書を称賛していることから，それほど翻訳（書）を毛嫌いしていたということではない。また，ジェームズ王（1566–1625）時代の欽定英訳聖書からは何と５千回も引用している。

［72］ 段落最後の文における比喩の典拠は次の文献の記述によると考えられている。Emanuel Browen（?–1767）: *A Complete System of Geography*（1747, 2 vols.）のなかの certain rivers “come from Mountains where there are Gold Mines, they carry some Grains of that Metal along with the Sand”（II, 578）という文である。

［73］ クラウディウス皇帝（The Emperor Claudius BC10–AD54）はプラウティウスの指揮のもと 43 年にブリテン島に侵攻した。しかし，軍は文化の開けていないその地を恐れ，上陸を拒否した。Elledge（1967: 266）はこう述べている。“Clearly the analogy was not meant to include the users of English: *coast* and *inhabitants* both refer to language, one aspect of which is mappable, and the other, dynamic, alive, in need of governing or ordering.” この段落の表現を Barrell（1983: 149）はこう解釈している。“There may be, as I believe there often is in Johnson's writings about language, an irony in this—evident perhaps in the words ‘frighted’, and ‘madness’—in which Johnson may be half-mocking the loss of the sense of proportion that he has incurred by devoting himself so entirely to lexicography—”

［74］ ‘he may stop with honour at the second or the third’ はキケロ（Marcus Tullius

Cicero BC106–AD43）の *Orator*（I, 3–4）による。同種の発言は『彷徨者』にもみられる。「人は完璧をより明確に意識するのに比例して，自分自身の業績について思いをめぐらす喜びは減少するだろう。それゆえ，最も称賛に値する人々の場合には，しばしば自分の成し遂げたことに有利なように決断することを怖れることが観察される。彼らは完璧を期すには力がどれほど不足しているかよくわきまえていて，心配と恐怖の心持で一般大衆の決断を待っているのだ。」（第169号）

参考文献

Barrell, John (1983) “2 The language properly so-called: the authority of common usage,” in *English Literature in History 1730–80*. London, Melbourne, etc.: Hutchingson, 110–175.

Bate, Walter Jackson (1975) *Samuel Johnson*. New York and London: Harcourt Brace Jovanovich.

Boswell, James (1934) *Boswell’s Life of Johnson*. Edited by G. B. Hill and revised and enlarged by L. F. Powell. 6 vols. Oxford: Clarendon Press. Originally published in 1791.

Braudy, Leo (1970) “Lexicography and Biography in the *Preface* to Johnson’s *Dictionary*,” *Studies in English Literature 1500–1900* (University of Victoria, B. C., Canada) 10, 551–556.

Chapman, Robert W. (1926) “Johnson’s *Plan of a Dictionary*,” *Review of English Studies*, II, No. 6 (April), 216–218.

DeMaria, Robert, Jr. (1986) *Johnson’s* Dictionary *and the Language of Learning.* Oxford: Clarendon Press.

Downes, Rackstraw (1962) “Johnson’s Theory of Language,” *Review of English Literature*, III (October), 29–41.

---------- (2000) *A Bibliography of the Works of Samuel Johnson*. Oxford: Clarendon Press.

Elledge, Scott (1967) “The Naked Science of Language, 1747–1786,” in *Studies in Criticism and Aesthetics, 1660–1800*. Edited by Howard Anderson and John S. Shea. Mineapolis: University of Mineapolis Press, 266–295.

Fussell, Paul (1972) *Samuel Johnson and the Life of Writing*. London: Chatto & Windus.

Greene, Donald J. (1960) *The Politics of Samuel Johnson.* New Haven: Yale University Press.

---------- (1989) *Samuel Johnson.* Updated Edition. Boston: Twayne Publishers.

Gunn, Daniel P. (2000) “The Lexicographer’s Task: Language, Reason, and Idealism in Johnson’s *Dictionary* Preface,” *The Age of Johnson: A Scholarly Annual* 11, 105–24.

Hardy, J. P. (1979) *Samuel Johnson: A Critical Study*. London, Boston and Henley: Routledge & Kegan Paul.

早川　勇（2007a）「英語辞書構想案におけるジョンソンの辞書編纂理念」『文學論叢』（愛知大學文學會）第135輯，1–22.

---------- （2007b）‘試訳その２の解題『英語辞書構想案』の成立’「「ジョンソン英語辞書構想案（1747）」試訳（その2）」『言語と文化』（愛知大学語学教育研究室）第17号，145–159.

Hayakawa, Isamu (2008) “Obsolete Words and Meanings in Johnson’s Dictionary”『言語と文化』（愛知大学語学教育研究室）第18号，1–13.

Hedrick, Elizabeth (1988) “Fixing the Language: Johnson, Chesterfield, and *The Plan of a Dictionary*,” *English Literary History* 55, No. 2, 421–442.

Hitchings, Henry (2005) *Dr Johnson’s Dictionary: The Extraordinary Story of the Book that Defined the World*. London: John Murray.

Holder, R. W. (2004) *The Dictionary Men, Their lives and times*. Bath: Bath University Press.

Horgan, A. D. (1994) *Johnson on Language, An Introduction*. Oxford: St. Martin’s Press.

Johnson, Samuel (1747): *The Plan of a Dictionary of the English Language*. London: Printed for J. and P. Knapton, et al. Reprinted by Longman, London.

Johnson, Samuel (1969) *The Rambler*. Edited by W. J. Bate and A. B. Strauss. 3 vols. New Haven and London: Yale University Press.

Keast, William R. (1952–53) “The Preface to *A Dictionary of the English Language*: Johnson’s Revisions and the Establishment of the Text,” *Studies in Bibliography* V, 129–146.

---------- (1953) “Some Emendations in Johnson’s Preface to the *Dictionary*,” *Review of English Studies,* IV (January), 52–57.

---------- (1954) “Johnson’s *Plan of a Dictionary*: A Text Crux,” *Philological Quarterly* XXXIII, 341–347.

Kolb, Gwin J. (1970) “Establishing the Text of Dr. Johnson’s ‘Plan of a Dictionary of the English Language’,” in *Eighteenth-Century Studies.* Edited by W. H. Bond. New York: Grolier Club, 81–87.

Kolb, Gwin J. and Robert DeMaria, Jr. (1995) “The Preliminaries to Dr. Johnson’s *Dictionary*: Authorial Revisions and the Establishment of the Texts,” *Studies in Bibliography* 48, 121–133.

---------- (2005) *Johnson on the English Language*. New Haven and London: Yale University Press.

Krutch, Joseph Wood (1944) *Samuel Johnson*. New York: Henry Holt and Company.

Leman, Sir Tanfield (1755) “Johnson’s *Dictionary of the English Language*.” *The Monthly Review, or, Literary Journal,* XII (April). London: Printed for R. Griffiths, 292–324.

Masi, Silvia (2006) “Lexicographic Material under Observation: From Johnson’s *Dictionary* to a Model for a Cognition-Based Dictionary of Lexical Patterns,” *Textus: English Studies in Italy* 19, No. 1, 237–58.

Maxwell, John, M. A. (1755) *A Letter from a Friend in England to Mr. Maxwell, complaining of his Dilatoriness in the so-long-promised Work*: With a character of Mr. Jonson’s English Dictionary, lately published and Mr. Maxwell’s Justification of himself, also, a Specimen of the Work which he has in Hand, in an explanation of the words, NATURE and ASSISES. Dublin, 25pp.

McAdam, Jr., E. L. (1970) “Inkhorn Words Before Dr. Johnson,” in *Eighteenth-Century Studies.* Edited by W. H. Bond. New York: Grolier Club, 187–206.

McCracken, D. (1969) “The Drudgery of Defining: Johnson’s Debt to Bailey’s *Dictionarium Britannicum*,” *Modern Philology* LXVI, 338–341.

McDermott, Anne (2005) “Johnson the Prescriptivist? The Case for the Defence,” in *Anniversary Essays on Johnson’s* Dictionary. Cambridge: Cambridge University Press, 113–128.

Metzdorf, Robert F. (1938) “Notes on Johnson’s ‘Plan of a Dictionary,’” *Library*, XIX (September), 198–201.

Meyers, Jeffrey (2008) *Samuel Johnson, The Struggle*. New York: Basic Books, A Member of the Perseus Books Groups.

Pearce, Christopher P. (2004) “Johnson’s Proud Folio: The Material and Rhetorical Contexts of Johnson’s Preface to the *Dictionary*,” *The Age of Johnson: A Scholarly Annual* 15, 1–35.

Reddick, A. (1990) *The Making of Johnson’s Dictionary 1746–1773*. Cambridge: Cambridge University Press.

Segar, Mary (1931) “Dictionary Making in the Early Eighteenth Century,” *Review of English Studies*, VII (April), 210–213.

Sherbo, Arthur (1954) “Dr. Johnson’s Revision of His *Dictionary*,” *Philological Quarterly*, 31 (October), 372–382.

Sledd, James, and Gwin Kolb (1955) *Dr. Johnson’s Dictionary, Essays in the Biography of a Book*. Chicago: University of Chicago.

Smith, Adam (1755) “Review of Johnson’s *Dictionary*,” *Edinburgh Review* I (1 January to 1 June 1755), 61–63. Reprinted in *Adam Smith, Essays on Philosophical Subjects.* Edited by W. P. D. Wightman and J. C. Bryce. Oxford: Clarendon Press, 1980, 232–241.

Strachan, L. R. M. (1942) *Notes and Queries*, CLXXXIII, 27.

Sudan, Rajani. (1998) “Lost in Lexicography: Legitimating Cultural Identity in Johnson’s *Preface* to the *Dictionary*,” *The Eighteenth Century: Theory and Interpretation* 39, No.2, 127–46.

Waingrow, Marshall (2001) *Correspondence and Other Papers of James Boswell Relating to the Making of the Life of Johnson*. Second edition, corrected and enlarged. New York: McGraw-Hill Book.

Wechselblatt, Martin (1996) “The Pathos of Example: Professionalism and Colonialization in Johnson’s Preface to the *Dictionary,*” *The Yale Journal of Criticism* 9, No.2, 381–403.

Weinbrot, Howard D. (1972) “Samuel Johnson’s *Plan* and Preface to the *Dictionary*,” in *New Aspects of Lexicography*. Ed. H. D. Weinbrot. The Hague: Mouton; Prague, Academia, 73–94.

Wheatley, Henry B. (1865) “Chronological Notices of the Dictionaries of the English Language,” *Transactions of the Philological Society* 10 (1), 218–293.

Wimsatt Jr., W. K. (1948) *Philosophic Words, A Study of Style and Meaning in the* Rambler *and* Dictionary *of Samuel Johnson.* New Haven: Yale University Press.

---------- (1959) “Johnson’s dictionary,” in *New Light on Dr. Johnson.* Ed. Frederick W. Hilles. New Haven: Yale University Press, 65–90.